

司会 ようこそおいでくださいました。神奈川大学法学研究所主催シンポジウム、自然保護と法——アマミノクロウサギ『自然の権利』訴訟の問いかけるもの——をただいまより開始いたします。

まず最初に、私の方から簡単な趣旨説明をさせていただきますが、皆様ここにお集まり下さった方々は、アマミノクロウサギ、それからルリカケス、アマミヤマシギ、オオトラツグミといった動物あるいは鳥を裁判の原告に仕立てた訴訟のことをご存じと推察いたします。今その訴訟は、実はそのステージは過ぎまして、環境保護団体あるいは自然調査活動を熱心に行っておられる方々に裁判の原告となる資格があるかどうかというところに進んでおります。そのところ、つまり、環境保護団体、あるいは自然調査活動を熱心に行っている方々の原告適格、裁判の原告となる資格を認めるという方向での理論構築、そこに腐心されてこられた弁護団の一員の山田隆夫弁護士に来ていただいております。本日のシンポジウムは、まずその山田弁護士の報告をいただいて、それからいろいろな分野の方々にお集まりいただきましたので、それぞれご自分の分野から切り込んでいただくという狙いがあります。

まず、山田弁護士の報告なんですが、皆様にお願ひしておきたいのは、山田弁護士ご自身は、人間と自然を同じ土俵に置いて、そして動物にも人間と同じように権利を認めるという立場では実はございません。そのところを認識しておいていただかないと、報告の趣旨がご理解できないかと思ひます。山田弁護士の報告のキーワードは、関係性ということにあるんですね。その関係性というのがどういうことなのか、これを言ってしまうと報告を何う興味がい殺がれますので申し上げられませんが、その関係性、あるいはもっと突き詰めていくと、自然の中でのフィールドワークというようにどこに行き着くはずで。そのところをよくご了解いただきたいんですね。

山田弁護士の報告は、いろいろな文献を渉獵した深い思索と、それからご自身、奄美大島を訪れて、地元の方と話を重ねられた思索と体験とのハーモニーという、そういうすばらしいものです。

続きまして松田裕之さん、この方は東京大学の海洋研究所で、私もよく、うまく説明できないんですが、漁業資源を中心とした生物資源の管理ということを中心としてやっておられる。ご専門が数理生態学という——数学と理科ですね、数理の生態学ということで、どうやら法律家の苦手なモデルというのをお使いになるようですが、そういう生態学がご専門です。

松田さんの報告は、もちろん法律の報告ではありませんで、ご専門の生態学から切り込んでいただきますが、松田さんの報告のキーワードは、恐らく不確実性というところにあると思います。この不確実性というのは、山田弁護士との報告では不可知性、自然の不可知、知ることができないというところと結びついてくるはずですので、そのところをよく注意していただきたいと思います。

続きまして、三番目に竹下賢先生、わざわざ関西大学からお越しいただきました。竹下先生は法哲学の先生で、きょう、実は東海大学で法哲学会があるにもかかわらず、ここに来ていただいております。

竹下先生は、環境国家論というすごいテーマをご研究なさっていて、そんなすごいテーマはあまり皆さんピンとこないかもしれませんが、実は計画というのがキーワードでして、その計画の基礎に自然科学の知識が必要になるというところで、松田さんの報告とつながってくると思います。

そして最後、トリが畠山武道先生、北海道大学法学部の先生、行政法、環境法、そして税法の教科書も書いておられますね。さらには独占禁止法などというところも研究されているすごい先生ですが、その畠山先生がトリを務めてくださいます。

畠山先生は、アメリカの環境保護法というすごい本もありますし、法律の細かい解釈だけでなく、環境倫理の方にも詳しい先生ですので、トリとしてうってつけの先生ということが言えると思います。

簡単ですが、これが今日の趣旨説明です。

報告に先立ちまして、法学研究所長の久保教授からご挨拶いただきます。

久保 恐れ入ります。ご紹介いただきました法学研究所の久保でございます。あちらの横の方でご挨拶申し上げようと思ったんですが、ここに据えられてしまいましたので、先生方には失礼でございますが、真中でご挨拶をさせていただきます。

内容については、今、交告教授の方から皆さんにご案内がございました。私の方からは、法学研究所、主催団体として研究所の趣旨について、ごく短い時間、皆さんにご紹介したいと思います。

神奈川大学というのは、法学部に法律学科、自治行政学科とございますが、それとは別個の学内的な組織でございますけれども、法学研究所というのをほぼ三十年近く前、二十数年になりますでしょうか、学部とは別個に置きましたのは、まさにいろいろな学際的な研究、それを行う機関を創ろうというのが一番の目的でございました。大学内部でも、法学部だけではなくて、他学部のいろいろなスタッフの方と共同研究を行う、そしてさらに学外のいろいろな専門家の方にご協力を願って、ある一つのテーマについて研究を行うということが趣旨でございまして、いろいろなそういう方向で事業をやってまいりましたが、そんな中でも今日の企画というのは、今の諸先生方のご紹介にありましたように、大変多角的で、また、現在の非常にアクチュアルなテーマを取り上げたということで、まさに研究所の設置の目的と非常にぴったりくるところがあるというふうに思います。という観点からご協力お願い申し上げます、ご快諾をいただいた先生方に研究所スタッフ一同を代表いたしまして、改めて厚くお礼を申し上げます。大変どうもありがとうございました。そして、この成果というのは「研究年報」というのを出版しておりますが、そちらにも使わせていただこうというふうに思っております。

私個人のことを申しますと、専門は国際法ということでございますので、必ずしもきょうのテーマに直結した問題を日常的に取り扱っているというわけではございませんが、しかし、ここにございますように、この後ろにもございますね、それから、従前から学内にはこういうふうなポスターがずっと各所に張ってございましたが、自然の権利、rights of natureという言葉があるようでございます。それと一方、これは国際レベルでいきますと、他方にはrights to development、発展あるいは開発への権利というふうに言われておりますが、そういうふうな立場の主張とこれがぶつかってくる。したがって、非常にいろいろな利益の衝突があり、したがって、その調整が必要になる。そういう分野の問題、その一環ということになるかと思えますので、それをどういう角度からどういうふうに進めていくのかという点は、私の専門の方からも決して無縁ではない、興味があるところでございます。

それから、お集まりの皆様は私の方からお誘いした、——これをご挨拶の最後にいたしますけれども、——今日の主役と申しましょうか、それはもとよりこちらにお並びいただいた先生方でございますけれども、皆様方も決してサイレントな聞き役という役割だけでは終わらないようにお願いをいたしたいと思えます。後で司会の交告先生の方からご案内もあると思いますが、フロアーの皆様方からのご意見、ご質問、これが非常に重要な部分、また、諸先生方のお考えを先取りして申し上げるのは大変失礼かとも思いますが、私もいろいろほかのところへ行つて話をするというようなときに、一番期待をしておる、ぜひそういうふうをお願いしたいと思うのが、参加される皆さん方らのご質問であり、ご意見という部分であるわけなんです。そういう形でここにせっかく集まった者、一緒にその問題を考え、深めていこう、そういう機会になれば研究所としても非常に幸いと思っておりますので、ぜひこの点、意識の上にお持ちいただいて、今日せっかくのこの時間をお過ごしただきたいというふうに思います。

それでは、これから本番に入ることになるかと思えますので、ご注目、またエンジョイされていただきました

いと思います。どうもありがとうございました。

奄美「自然の権利」訴訟について

——自然の法的価値とその保護——

弁護士 山田 隆 夫

(大坂弁護士会)

山田 ただいまご紹介をいただきました、弁護士の山田でございます。まず、私の方から三十分ほど奄美の自然の権利訴訟のことについてご報告を申し上げるといって予定になっております。

私は、今ご紹介いただきましたように弁護士でございます。大阪弁護士会に今所属しております。こういう大学の主催のシンポジウムにお招きをいただきまして、しかも諸先生方に私の担当しております事件につきましてコメントをいただく、あるいはこの会場で論議をいただくということを、大変光栄なことだと思っております。

「自然保護と法」というのが本日のメインテーマでございます。奄美自然の権利訴訟という一つの問題を通して、自然保護と法のあり方というのを考えてみようというのが今日のご趣旨であろうというふうに考えております。それでは、奄美自然の権利訴訟がどういうものであるかということについて簡単にご紹介いたしましょう。

実は、この裁判は一九九五年二月に提起されたものであります。この裁判をやる際に原告の表示欄に、通常もちろ

ん人間が訴えを提起するわけですから人間の住所と名前を書くわけですから、人間と並んでアマミノクロウサギ、それからアマミヤマシギ、ルリカケス、オオトラツグミという四種の野生生物の種名を表示したわけでありす。これが我が国最初のケースとなつたわけですが、この部分がいろんな興味を呼んだようでありまして、新聞あるいはテレビ等でかなり報道されたという経緯がございました。

それ以降、もうすでに五年以上経過しておりますけれども、裁判をやつて

まいったわけでありす。その裁判の本当の当事者は誰であったかということをご紹介しておきます。もちろん、自然物が原告として裁判をすることはあり得ないわけでありす。実際に原告団の中心のメンバーは奄美大島に住んでいるナチュラリストと環境保護活動に従事しておられる方達でありました。そして、さらに奄美大島を中心に活動しているNGO、いわゆる権利能力なき社団でありますけれども、環境ネットワーク奄美という団体が原告の一員になっておりました。それからさらに、この奄美大島以外のところに住んでいらっしゃる、そしてこの奄美の人たちに共

奄美自然の権利訴訟について 自然の法的価値とその保護

2000年11月11日

奄美「自然の権利訴訟」原告弁護団
弁護士 山田 隆 夫

第一、はじめに

1、奄美自然の権利訴訟とは

①訴訟の背景

②訴訟の内容

奄美大島での2ヶ所のゴルフ場開発予定地に関する林地開発行為許可処分（森林法）の取消・無効確認（行政訴訟）

③経過

1995年2月23日 訴訟提起（鹿児島地方裁判所）

1999年12月20日 弁論終結

2、訴訟のテーマ

①奄美大島の自然の特質

②自然の法的価値と環境法の新しい枠組み

③環境行政訴訟における原告適格

④本件開発行為の違法性

第二、環境保護と現代法

1、近代法の枠組みと環境問題

アトミズムの限界（個人と物への分解）

2、環境保護法の限界

福祉主義と環境主義

第三、自然の法的価値

1、エコロジー思想と環境法

環境思想とデモクラシー

2、自然と人間

内なる自然

3、自然の法的価値の特殊性

基礎性と公共性

4、自然の価値と対話

自然の不可知性

感、あるいは連帯を感じて原告になられた方が全国で十七名いらっしゃったわけであります。これがいわゆる人間原告ということになるかと思えます。被告の方は、鹿児島県の知事であります。

原告の中心になっておられたのは、三、四名の方であります。実は今日もその一人がこの会場にお見えなのですが、特に環境ネットワーク奄美の代表として活動してこられました蘭博明さんという方がいらっしゃいまして、その方を中心としたグループがこの裁判を今までやってこられたわけであります。

原告弁護士でありますけれども、実はかなり多数の弁護士が代理人ということでも、実質的に訴訟活動に従事したのは七名であります。大阪、そして名古屋の弁護士がおりますけれども、七名が訴訟活動に従事いたしました。

私は、その中で弁護団長というわけではございませんで、実は弁護団長は大阪の藤原猛爾弁護士であります。そし

第四、自然の価値の法的保護

1、自然にかかわる人間の権利と義務

- ①環境権
- ②自然享有権
- ③自然保護義務

2、自然のための適正手続

- ①情報の公開
- ②開発手続の適法性の司法審査
- ③開発や利用を企図する主体が、自然環境の基本的なシステムを破壊しないことを立証する責任を負担
- ④計画段階でのアセスメント
- ⑤当該開発行為を中止し、原状に復元するための法制度
- ⑥当事者主義をモデルとする自然の価値を防御する法的システム
(ナチュラリストや環境NGOが司法権の発動を促す法的資格をもつ)
- ⑦「疑わしきは保護せよ。」という原則的判断基準

第五、自然保護訴訟と原告適格

- 1、行政事件訴訟法9条
法律上の利益とは
- 2、環境行政訴訟と原告適格
誰が自然の価値の防御者としてふさわしいか
- 3、森林法と林地開発許可制度の保護するもの
人々と森林との人格的・精神的・経済的関わり
- 4、原告等の「法律上の利益」とは

第六、自然の権利と奄美自然の権利訴訟

- 1、自然の権利とは
 - ①自然の権利 ②樹木の当事者適格 ③動物の権利 ④自然契約
- 2、自然の固有の価値という考え方について
- 3、自然の権利は自然物を代弁するものか
- 4、憲法としての「自然の権利」

第七、おわりに（原告等の提起したもの）

- ①自然は人間の存在基盤であること
- ②本件訴訟の目的が自然の保護そのものにあること
- ③環境に関わる社会的意思形成過程には真摯な対話が必要であること
- ④ナチュラリスト・環境NGOが自分達の私的権利や私的利益のみに根拠とすることなく自然の法的価値に関する司法的論議を提起する法的資格をもつこと

て、特に自然の権利運動といったものを組織しまして、この裁判を縁の下で支えてきたのが、弁護団の顔とも言うべき籠橋隆明弁護士でありまして、彼は大変有名な環境派弁護士でありますので、御承知の方もあろうかと思います。私は、いわば弁護団の一員として戦術的な部分を担当するといいたほうが、あるいは理論的な部分について構成を考える、あるいは書面を書く、そういったことを担当してきました。さつき申し上げましたけれども、実はこの自然の権利訴訟というのは、その下支えになった自然の権利運動という、これは全国的な自然保護運動がございまして、それとの関わりで支えられて進めてきたという経過がございします。これは、この運動は、関東にもございしますし、関西にも大きなグループがありまして、これは環境保護活動をやっている方、あるいは環境派のジャーナリストの方、あるいはその他多数の方がご参加されています。こういう方に支えられ、いろんな形で支援を受けながら我々は裁判をしてきた、というわけでございます。

自然の権利訴訟とさつきから申し上げておりますが、私が先ほどから奄美という断り書きをつけておりますように、実は自然の権利訴訟という名前を名乗っておりますのは、このほかにもいろいろグループがございします。七、八件もすでに裁判が出ていると思いますけれども、我々はその中の一つであります。たまたま弁護団のメンバーが重なっているものもございしますけれども、基本的には別々の訴訟団体でありまして、何か統一的思想とか、あるいは統一的な考え方のもとに運動しているというわけではございません。そこに緩やかな連帯、あるいは共感といったものがあるというふうにご理解いただければと思います。

このほかでもうすでに裁判所の決定がおりております事件としては、水戸地裁と東京高裁で継続しておりましたオヒシクイの裁判ですね。これは、東京で環境問題をやっていらっしゃる弁護士さんたちが担当された裁判でありますけれども、それがすでに高等裁判所の決定までいっているということでもあります。

この自然の権利訴訟の中で奄美の訴訟がどんな特徴を持っているのかということですが、我々が一番最初に裁判をやったグループであるということがまず一言えるわけにあります。我々の裁判の特徴というのは、やはり自然の保護のあり方と言いましょか、あるいは自然の法的価値の捉え方と言いましょか、そういったものについて正面から裁判所で議論をした、その点についてかなり大部な主張をしてきたというところに我々の特徴があると思います。つまり、この訴訟は行政訴訟でありまして、技術的にはきわめて特定の法律の特定の条文の解釈論がテーマになっていたわけでありますが、それだけやっていたのでは、本当にあつという間に終わってしまうような裁判でありましたので、単にそれを技術的な問題に留めることなく、もっと自然保護、あるいは自然と法というようなところで視野を広げた議論を正面からやっていったのです。

この奄美の訴訟が一体どんな裁判だったのかということですが、これは簡単に申し上げますと行政訴訟でありまして、いわゆるお役所相手の裁判であります。そして、この場合は行政機関が為した決定を取り消してほしいという訴えをしたものであります。奄美大島の住用村と龍郷町という二カ所でゴルフ場の開発計画がありまして、森林法という法律に基づく林地開発行為許可処分というお役所の許可が必要な開発行為だったわけですが、県がゴルフ場開発行為に許可を与えたということに対して我々が異議申し立てをした、こういう裁判であつたわけです。

経過としましては、九五年二月二三日に訴えを提起いたしまして、一九九九年の十二月二〇日に弁論が終結しております。ところが、この弁論の終結というのが、実は最終段階までいって終結したというわけではなくて、とりあえずの終結ということでありまして、この五年間何をやっていたのかと申し上げますと、自然と法という論議をやり、原告の方たちの原告適格があるかどうかという議論をやりました。後ほど申し上げますけれども、行政訴訟という制度のなかでは、一定の法律上の利益のある人だけしか訴えを提起できないという仕組みになっておりますので、門前

払いの可能性があるわけです。原告適格があるかないかという論議を五年間やってきた。そこで一旦弁論が終わっている、こういう状態であります。まだ実体の審理には入っていないのでありますけれども、裁判所としてはこのあたりで一旦判断を下したいという意向でございまして、去年の十二月に弁論終結がされました。

その後、半年ぐらいで裁判所は何らかの判断を示すのではなからうかという話であつたわけですが、もうかれこれ一年近く経っているんですが、まだ裁判所が判断をするという兆しはございません（その後判決期日が二〇〇一年一月二二日と指定されました）。

この裁判で我々がテーマにしてきました問題点が四つございます。まず一つは奄美大島の自然の特質ということがあります。それからもう一つは、自然の法的価値と環境法の枠組みということでもあります。三つ目は、これはさっきから申し上げております環境行政訴訟における原告適格の問題であります。そして最後に、この開発行為の違法性、もつと言え、その違法な開発行為を許可したお役所の処分の違法性という四点であります。論理的に整理すればそういう枠組みになるわけですが、実は今日シンポジウムで私がお話申し上げたいと思っているのは、このなかで、自然の法的価値とは何だろうかという問題、それから環境行政訴訟における原告適格、これらについて我々がどんな考え方を持っているのかを順次ご紹介したいと思ひます。

この裁判をやるに当たりまして我々としては、簡単に裁判所が訴えを却下するのではないかと当初考えていたわけであります。それで、戦術的にも少しでも長く開発行為を食い止めたいという思いもございまして、ひとつ徹底的に思い切った論議をやってみよう、こういうことを当初から弁護団であるいは原告団と話し合っております。自然が破壊されていく、さつき申し上げました四種の野生生物というのはみんな法的な保護がすでに為されている、そういう生物種なんですけれども、その生息地が破壊されていく。それにもかかわらず、行政機関が開発行為に対して

許可を与えている。これは一体どういうことなんだろうかということを、いわば原点まで遡って論議してみよう、こういうことであつたわけです。

ここで、ちよつとそういう議論を紹介して、後ほどの先生方のコメントをちようだいしたいというふうに考えております。そもそも法律というのは、自然を非常に守りにくい仕組みになつていゝのではなからうかというのが、我々の問題意識の出発点であります。近代の法律というのは、すべて人間は個人として尊重されるという、いわゆる個人主義というところからスタートしているわけでありすけれども、個人というのは一体何だろうかというわけがあります。すべて人間というのは、自然とか、あるいは社会というものから切り離された抽象的な存在ということでは価値を認められるわけでありす。

それから次に自然というのは、法律的な概念としては、これは環境保護法には存在しません。近代法の一番基本的な枠組みの中には自然という概念はないわけでありす。近代法の下では、すべての自然は特定可能な有体物で、つまり、動産ですとか不動産に分解されてしまふわけでありす。そして、人間と自然との結びつきというのは、例えば所有権といったような物権をもつて支配するという関係において把握されるわけでありす。

このような考え方は、そもそも人間が生きてゐる実態とかなりかけ離れた世界観を前提にしているわけでありす。人間というのは否応なく、ほかの人がいない、つまり社会というものが存在しないと生きていけないわけでありすし、さらに、自然界の循環あるいはシステムといったようなものの中で生きざるを得ないわけでありすけれども、そういったものとも切り離されたところで法律の人間観・自然観というのはスタートしているところがまずポイントかと思ひます。

もちろん現代の法律の中にもいろいろ環境保護のための法律があります。ただ、こういう法律も近代法の中ではむ

しろ補完的なもの、あるいは例外的なものという位置づけになっているのではなからうかと思えます。つまり、まず個人の尊重というものがある。そして、それを補完するものとして公共の福祉という原理が働いている。その公共の福祉というもののなかで、例えば自然物の保護あるいは自然環境の保護というものも位置づけられている、こういう仕組みになっているのではないかと思うわけであります。

結局、そういう仕組みのなかでどういうふうにして自然保護を図っていくかということになりますと、例えば珍しい生物種がすんでいる、あるいは何かレクリエーショナルな価値がある、あるいはさらに景観ですとか、特定可能な資源が存在するというようなところに限って地域を指定し、そのなかで人間の行動を規制する、あるいは生物種を指定したりして保護をするという手法にならざるを得ないわけであります。つまり、そこではもともと広域的な、あるいはシステムのな保護ということが考えられておりません。

さらに、こういう近代法の問題点というのは、司法的な救済システムというのを考えてみればよく分かります。例えば公害問題を考えてみます。一体どういう人たちがそういう環境破壊に対して救済されるのかと言えば、生命ですとか身体ですとか、そういう見える、はっきりと把握できるような権利を、しかも把握できるような形で破壊された人だけが司法的な救済が許される。しかも、その場合でも、裁判上の立証という負担を負う。そういう立場にあるわけです。ましてやこれが公害ではなくて環境保護ということになってまいりますと、一体、私人、普通の人間がそれに対して異議申し立てをできるのかどうかということ自体が非常に危うくなってくるわけです。

そういうところから出発しまして、私たちは自然の法的な価値を守るための新しい法的な枠組みを考えてみようとしたわけがあります。自然の法的価値、言葉を換えて言いますと、自然というものを法律上どういうふうには価値ある存在として捉えていくかということを考えてみたときに、幾つか視点があろうというふうに思います。

まず一つは、最近ここ五〇年ばかりの間に発展してきた、いわゆるエコロジーの思想です。そういう環境思想というものと、法的な考え方というのをどういうふうにして連携していくのかという問題であります。

それからもう一つは、自然というのをそもそもどう捉えたらいいんだろうかという問題であります。自然という言葉をやさしからあまり意味を限定せずに使っておりますが、根本的には自然界の流れ、あるいは展開という言いまじい、そういうプロセスという言いまじい、私の言葉で言えば関係性ということでありまじいけれども、そのようなものとして捉えられるわけでありまじい。さらに個々の自然物とか、あるいは生物の種ですとか、あるいは地域個体群といったもの、あるいは山や海といった自然物、そのようなものもまた自然と捉えられるわけでありまじい。法律がどんなふうにして自然というのを捉えたらいいんだろうかというのがもう一つ大きなポイントであります。

三番目は、自然を考えると、まず把握しておかないといけないのは、自然というのはやっぱり一番根源的には我々の生存を支えているという意味で根本的な、基底的な価値を持っているというふうに考えるべきだろうという点であります。それともう一つは、同時にそれは本来、一人の人間の権利で把握したり、あるいは支配したりということができない性格のものではなからうかというふうに考えられるわけでありまじい。それを我々は自然の公共性という言い方をしているわけでありまじい。

それから四番目ですが、我々が自然物、あるいは自然というものの価値をどれほど明確に認識し得るかということになりますと、なかなか容易なことではなななせん。例えば、先ほどの奄美の例で言いますと、二つのゴルフ場ができたところで誰かの命が奪われるのか、あるいは誰かの健康が害されるのかというところ、そういうような因果関係があるわけではなななせん。ですから、なかなか価値の把握は難しい。かと言って、そのような形で自然の破壊が行していくと、いつかは人間の生存そのものも脅かされてしまなな。それでは一体、どこまでの破壊を許容できるか、

あるいはどこまで守ればいいのか、その基準が見えているのかということ、これもまた見えていないわけでもあります。そういう状態を我々は自然の不可知性というふうに表現したわけでもあります。

つまり、自然の法的価値ということを考える上で、今のような四つのポイントのもとで法的価値を構成していくという必要があるかと考えたわけでもあります。

次に、自然の法的価値を法律でどんなふうにして守っていけばいいかということについて、我々はいろんな議論をこの訴訟のなかでやってまいりました。

まず一つは、自然に関しての権利、義務というアプローチであります。環境権という権利が昭和五〇年代、実際はもう少し古くから言われているようですけれども、主張されました。さらにその一〇年ほど後に日本弁護士連合会が自然享有権という権利を提唱いたしました。そういう権利との関わりで議論ができないかといったようなことも我々は考えたわけがあります。しかし、我々が一番ポイントにしたのは、むしろ自然のための適正手続という論点であります。さつき私が自然というのは不可知であるというふうに申し上げましたけれども、不可知ではあるにしても、人間の社会がこの地球上で営まれて、日々開発か保護かという選択を我々が迫られていかざるを得ない以上、自然の価値あるいは自然物の価値というものをそれなりに評価しながら、意思決定をしていかなければならないわけであります。私たちが考えたのは、そのような価値について誰かが公権的に、一方的に判断すればいいというものではない。つまり、必ず自然の不可知性というものを前提にしながら、真摯な、まじめな対話をやっていくその過程で自然の価値というものを評価していくほかはないということを主張したわけでもあります。

そもそも価値についての論議ができるのかという問題がございます。哲学上の価値相対説という考え方がございます。価値についての論議はできないというのも一つの立場です。しかし、私は、やはり人間存在との関係で自然とい

うものを考えてみたときに、その価値はある一定の事実のなかで把握できると理解しております。自然の価値は、そういう事実との関係で、真摯な対話によって論議が可能である、そういうものなんだと捉えたいのです。

ただ、実際にこの社会で、例えば裁判の場でそういう対話をしようとしても、開発する側と保護しようとする側との間には、当然最初から圧倒的な力の差があるわけがあります。この裁判におきましても、開発行為を許可したのは行政であります。これを守ろうとしたのは、ナチュラリストあるいは環境保護活動家であり、環境NGOであったわけでもありますけれども、いわば徒手空拳で行政に立ち向かっていったわけがあります。そういう構図のなかで真摯な対話を実現しようと思えば、対話がまじめな、しかも合理的なものになる法的な条件が要するというふうに考えたわけがあります。そしてそれを自然のための適正手続というふうに呼んだわけがあります。

レジュメの第四の算用数字の2というところに、①から⑦というふうにとりあえず括弧してみましたけれども、それが我々が考える対話の法的条件ということになるわけがあります。

次にちよつと観点を変えまして、この裁判の技術的な側面にも少し触れておきたいと思ひます。さつき申し上げましたように、この裁判はいわゆる行政訴訟であります。つまり行政機関の決定、この場合は県でありますけれども、開発行為を許可する県の決定を取り消せという裁判をしたわけがあります。そういう裁判をやるためには、実は原告となる人には一定の条件が必要だということが法律で決まっております。そういう条件を決めているのが行政事件訴訟法という法律でありますけれども、その九条で、法律上の利益を持つ者のみが、さつき申し上げたような取消訴訟を提起できるということが書いてあります。ここにもさつき私が申し上げた近代法の枠組みというものがある。明確に生きているわけです。つまり、法律というのは人間個人の個別的な利益というのを守るとするのがその建前になっておりますので、そういう利益を破壊された人だけがお役所に対して文句が言える、こういうストーリーになっているわけ

であります。

ところが、実はこの事件でいわゆる原告になった方には、その開発予定地に対する所有権、あるいは財産権といったようなものはございませんでした。その人たちはその地域で、例えばアマミノクロウサギや鳥類の観察をしていたり、あるいはアマミノクロウサギの生息地を保護するという運動をしたりしていた人たちであります。そういう関わりは、現代の法律のなかでは財産権とみなすには難しい。それでは、何か人格的な利益があるかということになりますと、ないとは言えないけれども、かなり希薄な権利ということを言わざるを得ないわけであります。仮に権利というか利益というかは別にしまして、いわゆるプライベートな利益という点では関わりの薄い人たちであつたわけであります。これはNGOも同じです。

ところが、我々はこの法律上の利益というものを、そういう財産権的な考え方ですべて括ってしまつてはいけないんだという主張をいたしました。そして、そういう自然物、この場合は開発予定地域の森林でありますけれども、そういう森林と人格的な、あるいは精神的な関わりを持っていれば、それで法律上の利益はあるんだ、あるいはもともと法律上の利益とは、環境訴訟の場合は、誰がそういう自然の価値を守る資格を持っているのかという観点から理解していくべきなんだという主張をいたしました。これは、現行法の解釈としてはなかなか難しいものであります。我々も弁護士でありますので、日常的に従事している法律実務ということから考えてみた場合に、このような主張が簡単に認められるとは考えておりません。

しかし、そう言つてしまつては、実は日本の環境裁判というのは、いわゆるプライベートな利益を持っている人だけができるということになつて、かなり話が小さくなつてしまふ。あるいは環境保護ということ考えたときに、物事の本質とずれたものになつてしまふということから、あえてそういう主張を裁判所につけていったわけでありま

す。

我々のこういう主張に対して裁判所がどういう態度を執ったかと言えば、ある意味では鹿児島地方裁判所の裁判官は大変立派でありました。通常の裁判所の裁判官でありますと、大体鼻でせせら笑って訴えを却下するというのが通例であります。そうされても我々は、実は訴訟の初期のころ止むを得ないと思っていたんでありますけれども、五年間も辛抱してつき合ってくれたわけです。そして、我々が書いていく書面を実に丁寧に読んでくれました。つまり、裁判所も現代の法律のなかでなかなか環境保護というのはうまくいかない。いかないけれども、あなたたちの言うことはある程度分かる、こういう姿勢を暗に示したのではないか。善解すれば、我々はそういうふうに、つまり、いい方に理解しているわけであります。結論がどうなるかまだ分かりませんので、あまり褒めてもおられないのでありますけれども、ただ、このようなことは一般的にはちよつと考えられないことでした。

実は、この自然の権利訴訟に関しては、他の裁判所も、あまりやみくもに訴えを却下するという態度に出ませんでした。やはりこれは、さつきちよつとご紹介を申し上げた自然の権利運動という広範な運動が存在したからではないかと思うんです。つまり、裁判所も我々がやっていることが現代の法律の枠組みのなかにはなかなか押し込められないにもかかわらず、無下にそれを蹴るというのがやはり社会的に見ておかしいという常識が、どこかに裁判所に働いていたのではなからうかというふうに推察しております。

原告の方たちが開発予定地にどんな関わりを持っているのかということを申し上げますと、やはりその土地で自然を観察し、あるいはそこからいろんな情報を得る。それは、単に科学的な情報だけではなくて、いかに自然を保護するのか、あるいはどこまで開発しているのか、そういう文化的な、あるいは社会的な情報もそこから得ようとしているんだ。そういう関わりは、正面から保護すべきなんだ。またそれは、行政事件訴訟法の法律上の利益というにふさ

わしいものなんだという主張をしたわけであります。

実は、最後に自然の権利のお話をしたいと思います。私は奄美「自然の権利」訴訟の話をしてながら、自然の権利の話を今まで全くしておりません。自然の権利というのは一体何だろうかという問題であります。

我々も自然の権利訴訟と名乗ってはおりません。また、最初、訴状に原告として四種の野生生物の種名を掲げてはおりません。しかし、自然の権利というのが何かということについて明確な定義を持っていたわけではございません。そして、それは現在でも明確な定義をしているわけではございません。内輪話を申し上げますと、自然の権利というものの捉え方には、各弁護士の間でも相当な違いがございます。それから、実は我々奄美の弁護士の間でも相当な違いがあったわけです。私が申し上げる考え方が弁護士主流の考え方かというと、実は当初はそうではございませんでした。他のメンバーと相当激しいやり合いをして、私の主張する考え方が奄美の弁護団の到達点になっていったということでありまして、まだまだこのあたりは論議が残っているところであります。

自然の権利という考え方を巡っては、世界にいろんな流れがございます。一つは、アメリカで言われている、先ほども紹介があった rights of nature という考え方があります。これは実は人間の人權と同じようなものを自然物に認めようという考え方があります。これは、人間と自然というものが一種の倫理的な共同体を作っているという考え方を前提にしまして、そういう枠組みの中で人間に認められているのと同じような平等な権利を自然物にも認めるべきだ、こういう考え方があります。

それからもう一つは、樹木の当事者適格という考え方がございまして、この考え方は、アメリカのクリストファー・ストーンという学者が提唱された考え方でありますけれども、人權と同じものを自然物が持っているわけではなけれども、裁判の当事者にはなることができる、こういう考え方があります。これはむしろ幾分か技術的な考え方

ではあるわけですが、そのような考え方を執ることが自然保護にとって良い結果をもたらすという、いわば結果オーライという、そういう考え方です。

それからもう一つ、動物の権利という考え方がございます。これは、動物にも人間と同じような権利がある。さっきの自然の権利と違うところは、動物に限定しているということです。しかも、動物の個体ですね。一匹一匹といひましようか、一頭一頭といひましようか、そういうものに人間と同じような権利を認めてもいいと、こういう考え方を提唱する立場であります。

それからちよつと違う考え方としまして、これはフランスの哲学者が言っておる考え方ですけれども、自然契約という考え方がございます。社会契約という言葉はお聞きになったことがあると思いますが、人間と自然との間にもそういう社会契約類似の黙示の契約があるという考え方があります。

実は、私は今申し上げた四つの考え方はいずれも正しいと考えているわけではありません。自然保護や環境保護との関連で考える場合に、自然物あるいは自然というものの価値を法律的にどう把握するのかということが一番の問題であるというふうに考えます。そのなかで、例えば自然物に当事者適格性を認めるといった考え方もあるいは可能かもしれません。しかし、それは実は本質的な問題ではない。むしろ、さっき申し上げた自然の価値をいかに対話によって発見していくのか。その対話をどうすれば適正なものにすることができなのか。行政とか、あるいは大きな力を持つ社会勢力によって一方的に自然が利用されることのないような、そういう社会の仕組みをつくることが一番重要なことではないかと考えているわけであります。

私がこの自然の権利訴訟に関与したというのは、これは何にも増して原告の方たちの自然に対する思いというものに深く共鳴したからであります。そういう意味で、自然の権利というのも一つのメタファーと言いましようか、隠

喩としての意味は十分持ち得たのではないかと考えております。

まとめてみると、人間というのは自然がなくては生きられない、自然は人間の存在基盤であるということ。そして、簡単には分かりはしないけれども、個々の自然物や一定の地域の価値というものをどういうふうに守ればいいのかということ正面から論議しようとしているんだということ、そして、その自然の価値を見出していくには、対話を通じた真摯な社会的な意識形成過程が要るんだということ。さらに、いわゆるプライベートな利益を持っていないような、そういう人にも自然の価値を法的に論議する資格があるんだ、そういったようなこと。こういった事柄を包括的に隠喩する、そういう思想として自然の権利思想というものは十分社会的な意義を果たしてきたし、運動の求心力としての価値も持って来たというふうに思うわけです。

実は、私がこの裁判に関与しまして、徹頭徹尾弁護団のメンバーと戒め合ってきたことがありました。それは、いわゆる借り物の外国の思想に乗っかって、適当に法的な主張を組み上げてそれを解釈に結びつけるといったようなことをするのではなくて、地に足をつけた議論をしていきたい。原告団の方の思いをいかに法律という枠組みの中でうまく表現していくか、それをできる限り地道にやっていくということでもあります。

実は、私たち弁護団が非常に大事にしてきた言葉がございます。原告団の中心となられた蘭博明先生から教えていただいた言葉ですが、奄美には「水や山おかげ 人は世間おかげ」という言葉があるそうです。それから、私の奄美語の発音は無茶苦茶ですけども、「ムングトウヤ ナナデイサキ カンゲレイヨ」という言葉があるそうです。これは、物事は七代先を考えるんだという、奄美の古老の戒めだそうです。結局、私たちはこういう奄美の古老、あるいは奄美に現在住んでいらっしゃる原告の人たちの思いというものをいかに法的に表現していくかということが一番の大きな課題であった。それに自然の権利という言葉を使い、さらに自然の法的価値を問うという考え

方を展開していったというのが、私たちのこの裁判での仕事であったということを経最後に申し上げたいと思います。
ちよつと長くなつてしまいましたけれども、以上のようなことで、ありがとうございました。(拍手)

生態学と自然保護の根拠

東京大学海洋研究所助教授 松田裕之

(数理生態学)

松田 東大海洋研の松田と申します。私も自然の権利というものについて今まで実は深く考えたことはありませんでした。水産学と数理生態学というものをやっていたけれども、「自然に権利があるの?」という感じで、もうそこから先は全然勉強しなかったというのが率直なところです。でも、今、山田さんがおっしゃられた、とにかく自然を守るときにどういう法的根拠ができるかということと同じこととして、生態学の立場から一体どんな根拠が作れるか、ということが語れるかということを考えてときに、いろいろ感じたことがありますので、ここにレジュメを用意させていただきました。「当日は、松田裕之『環境生態学序説』(共立出版、二〇〇〇年)の草稿の一部がレジュメとして配布された。以下レジュメに言及されている箇処には、同書の該当頁数を括弧書で付す。」

まず、私は特に水産学をやっておるんですが、一番水産で大事なことは、乱獲に対する戒めです。獲り過ぎてはいけない、持続可能な漁業が必要だ。この持続可能という言葉は水産学の基本理念であります、今や環境を語る上で